２０２２年2月６日

「御心のままに」

マルコによる福音書１４章３２－４２節

森島 牧人　牧師

与えられたみ言葉は、その中でペトロの離反を予告された最後の晩餐を終えた主イエスが、祈りのために度々行かれていたオリーブ山のゲッセマネと呼ばれる所にまた出かけて行かれた時のことで、短い箇所ですが、他に例のない人間イエスの苦悩が語られています。

聖書は、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴って園に入られたイエスが、ひどく恐れてもだえ始められたと始まります。主がこの三人を伴われる場面は何回かありますが、山頂の変貌やヤイロの娘の場面など、いずれも神の業が鮮やかに発揮された時、また聖書の奥義が示された時に限られています。

さて聖書は「彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。』少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』と、こう言われた。それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。『シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。・・・目を覚まして祈っていなさい。・・・』更に向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。」（マルコ 14：32－39）と続いています。

ここに描きだされているもの、それはこともあろうに不安に怯え、神の前に木の葉のように震える主イエスの姿です。それは奇蹟を行う主イエスではなく、完全に人間側の存在の主イエスです。しかし一方では、神に対して「お父ちゃん・パパ」と呼びかける係わり方を持つ主イエスでもあります。「お父さん、どうかこの杯を取り除いてください。しかし、御心のままに。」と祈り続けながら、途中で主は眠っているシモンに、何度も声をおかけになります。「アッバ」と「シモン」、この二つの呼びかけの狭間、つまり神と人の狭間に立って主イエスは祈っておられるのです。

３０年に亘り神の促しの中に歩まれた主は度々山に上り、神の促しを確かめるために祈られました。今日の場面はまさに自らの十字架の死に慄きながら、それが神の促しであるのかどうかとの祈りを繰り返される中で、神の促しが主イエスを圧倒して行くという場面です。その横には肉の本性をさらけ出して眠りほうける三人の姿がありました。三人はこの時、主と苦しみの夜を共にし、その苦悩と父なる神への完全なる服従「御心のままに」の証人となるはずだったのです。眠りこけるという形で主を裏切ったペテロは、その後も裏切りを重ね、それは大祭司の屋敷の中庭まで続くことになります。そんな彼らへの主イエスの限りない愛は、「アッバ」と呼びかける祈りと、「シモンよ」と声をかける訴えの反復の中に滲み出ています。私たちのための主の一回だけの十字架の死、その一回性の上にのみ支えられているのがこの反復であり、それは今も私たちを支え続けているのです。

そして聖書は「イエスは三度目に戻って来て言われた。『あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。・・・立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。』」と記しています。この中の「もうよかろう」との言葉は、神の促しを確認し、傍らに眠りこけているペトロら信仰者を背負って立つという、主イエスの決断の言葉に外なりません。その中には主イエスの際限のない愛による＜同意＞が含まれています。さらに「立て、行こう」には、弟子たちが眠い目をこすっても進むことへの主の＜同意＞と＜命令＞が含まれています。

聖書ではこの主の言葉の後、すぐにユダが進み寄って来たとありますが、この「すぐ・直ちに」は、時の流れを切断する＜神の御業＞の威力の表現で、人間の時の流れに上から垂直に入って来る神の御業です。神の業によって近寄って来たユダは、先生と言って主イエスに接吻し、主イエスは捕らえられます。ある者は剣を抜いて打ってかかりますが主イエスに止められ、弟子たちは皆主イエスを見捨てて逃げたと、聖書は語っています（同 14：43－50）。あっけないように思われますが、主にとってこの事柄は神の促しを確かめるためのものであり、主イエスと父との対話と弟子たちへの訴えの間、つまり神と私たちの間に立たれる主イエスの必然的な出来事が今、始まり出したというのが、今日の聖書の語る所であります。　（説教要約　羽入田悦子）